

令和 2 年度エゾシカ捕獲対策業務 実施状況

1. 個体数調整（右岸堤防地区）

(1) 個体数調整の実施位置

令和 2 年度は、令和元年度と同様の場所に大型囲いワナを 2 基設置して捕獲を実施している（図 1）。より効果的に誘引するため、誘引およびワナ設置を例年より約 1 か月早めた。広範囲からの誘引の必要性が示唆されたことから、誘引地点を増設した。また、浸水の恐れのある 3 月を避け、2 月中にワナを撤去する予定である。

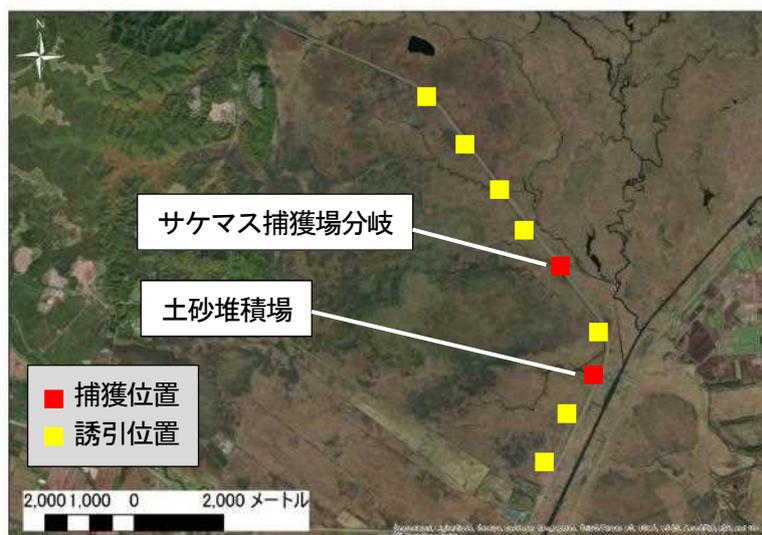


図 1 捕獲場所および誘引場所

(2) 結果（2月16日現在）

サケマス捕獲場分岐と土砂堆積場で合計 12 回の捕獲を実施し、合計 83 頭を捕獲している。

表 1 捕獲スケジュールと捕獲状況

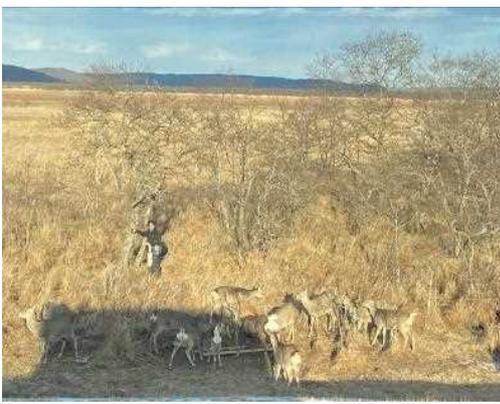
日付	サケマス捕獲場分岐					土砂堆積場			
	小計	内訳			小計	内訳			
		オス	メス	仔		オス	メス	仔	
2020年10月9日	給餌開始								
2020年10月27日～30日	ワナ設置								
2020年12月1日					5	1	2	2	
2020年12月9日	7	2	3	2					
2020年12月21日					7		5	2	
2020年12月25日	7	2	2	3					
2020年12月27日					3	3			
2021年1月17日					9	1	5	3	
2021年1月17日	8	2	3	3					
2021年1月19日					11	1	5	5	
2021年2月3日	5	3	1	1					
2021年2月7日					6		3	3	
2021年2月8日	8	3	3	2					
2021年2月14日					7		5	2	
合計	83	35	12	12	11	48	6	27	15

- ・ 今年度は、同地域での捕獲の3年目となり、捕獲効率の低下が予想されていたため、誘引の努力量を増やし週6日程度の頻度で給餌した。すべての給餌地点で誘引効果を確認した。
- ・ 作業車両は可能な限り統一し、より広範囲の個体の誘引効果を上げるため給餌の度に笛を鳴らすことで学習効果を高めた。
- ・ 1月以降、捕獲した後に新たなエゾシカがワナに入るようになるまでの日数が例年より早くなった。積雪により、湿原内の餌資源が利用できなくなったことや誘引開始から日数が経過したことで誘引効果が強くなったことなどが理由として考えられる。

(3) ここまでの課題

- ・ 広範囲からの誘引の結果、ワナから約1kmの誘引地点を利用してエゾシカがワナ周辺まで誘引されていることが雪上に残った足跡などにより確認されたが、その個体が捕獲できているかどうかは不明である。広範囲の誘引効果を検証するためには、個体もしくは集団の識別が必要である。
- ・ 地面が凍結する前にワナを設置したため、ワナの支柱が傾きやすく安定しなかった。

現場写真

	
<p>ワナの状況 (サケマス捕獲場分岐)</p>	<p>非積雪期のワナの状況 (土砂堆積場)</p>
	
<p>傾いた支柱 (サケマス捕獲場分岐)</p>	<p>給餌状況 (赤沼周辺)</p>
	
<p>積雪後のワナ周辺の様子 (土砂堆積場)</p>	<p>積雪後のワナ周辺の様子 (サケマス捕獲場分岐)</p>

2. 個体数調整の効果検証等

2-1. ロードセンサス（右岸堤防地区）

令和元年度と同様の調査方法でロードセンサスを実施した。

平成 29 年度から令和 2 年度（1 月まで）の結果を図 2-1 に示す。

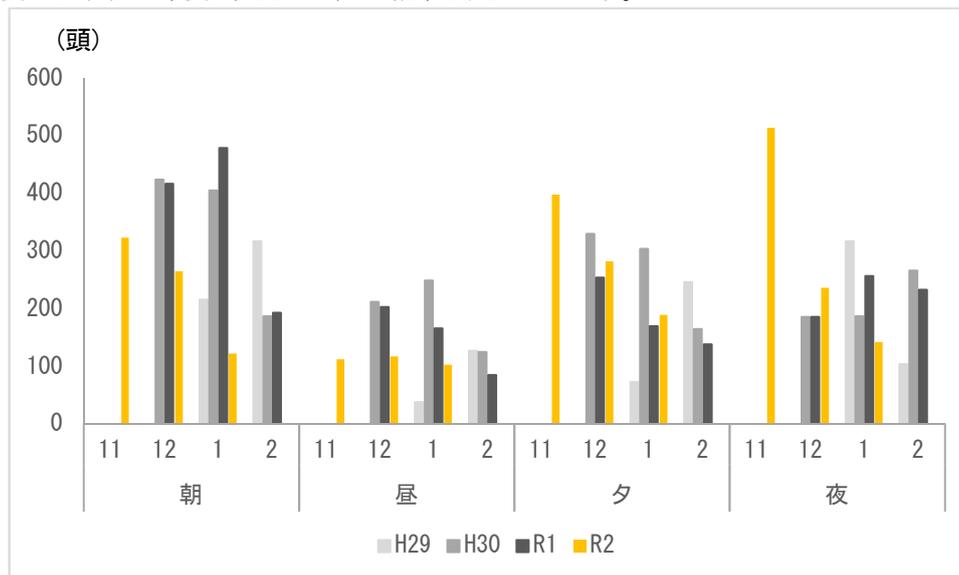


図 2-1 右岸堤防地区における確認頭数（H29-R2 年度、11 月～2 月の朝、昼、夕、夜）

月が進むにつれて確認頭数が減る傾向については例年見られるが、今年度は特に顕著であった。しかし、捕獲効率は下がっておらず、早期からの誘引による学習効果が出ていると考えられる。

今年度は積雪が記録的に遅かったが、積雪深は過去 3 年では最も多く推移している（図 2-2）。積雪が多いと堤防道路沿いでエゾシカが観察されなくなると言われており、1 月（降雪後）の観察数が減少したという結果には捕獲による影響だけでなく、積雪の影響も考慮する必要がある。

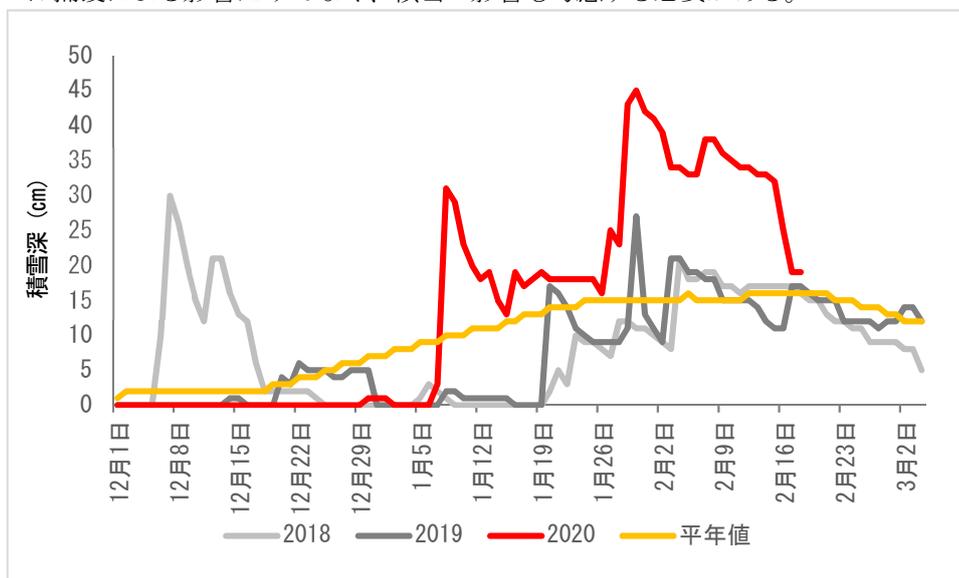


図 2-2. 2018 年度-2020 年度の釧路の積雪深（気象庁データ）

* 平均値：過去 30 年間の平均値を基に算出

*

2-2. 定点センサス（右岸堤防地区／コッタロ地区）

・コッタロ地区

これまで道道 1060 号線でロードセンサスを実施していたが、今年は道道 1060 号線が通行止めのため、代わりに定点センサスを実施した。二本松展望地とサルルン展望台から調査を行い（図 2-3）、1 回の調査時間は 30 分とした。令和元年度業務で選定した捕獲候補地を中心点としてまとめた結果を図 2-4 に示す。

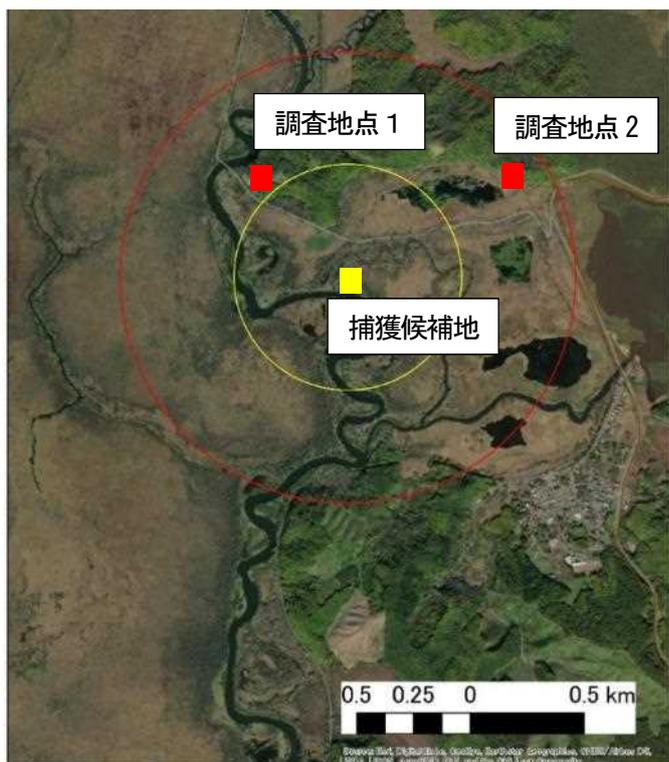


図 2-3 コッタロ地区におけるカウント範囲と調査地点
(捕獲候補地を中心に黄円が半径 500m, 赤円が半径 1000m)

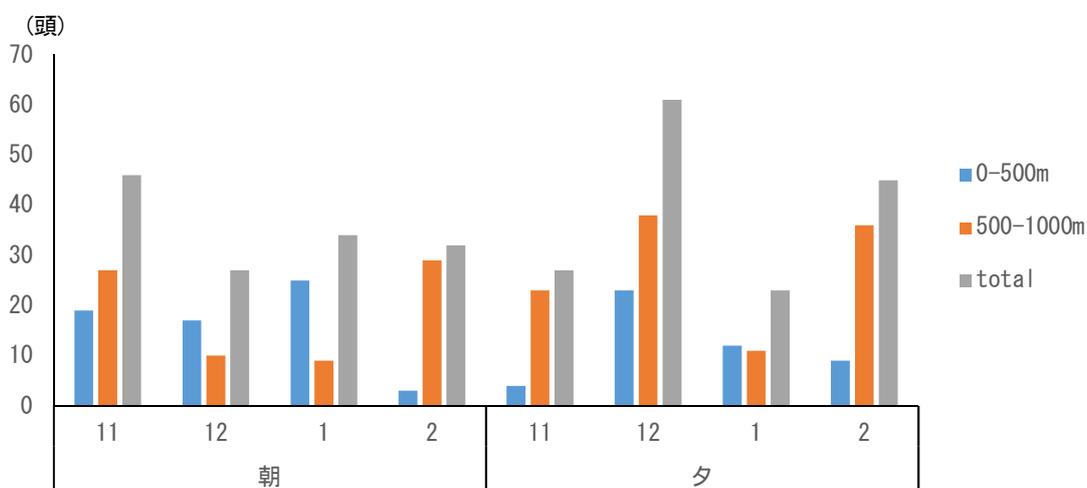


図 2-4 コッタロ地区の定点センサスの結果 (11 月～2 月の朝と夕)

- ・ 定点センサスで、二本松周辺を利用するエゾシカを概ねカウントできていたと考えられる。
- ・ 生息状況は例年並みであり、積雪が増えた後も大きな変化はなかった。

・ 右岸堤防地区

右岸堤防地区では、大型囲いわなの捕獲対象となるエゾシカの個体数を把握するため、定点センサスを実施した。センサスは誘引開始時、捕獲開始時、捕獲開始後のタイミングで行い、10 時と 15 時の 2 回、ワナ位置を中心とした半径 500m、1000m 内のエゾシカを目視でカウントした。サケマス捕獲場分岐、土砂堆積場における定点センサス結果 (15 時の観察頭数) を図 2-5、2-6 に示す。

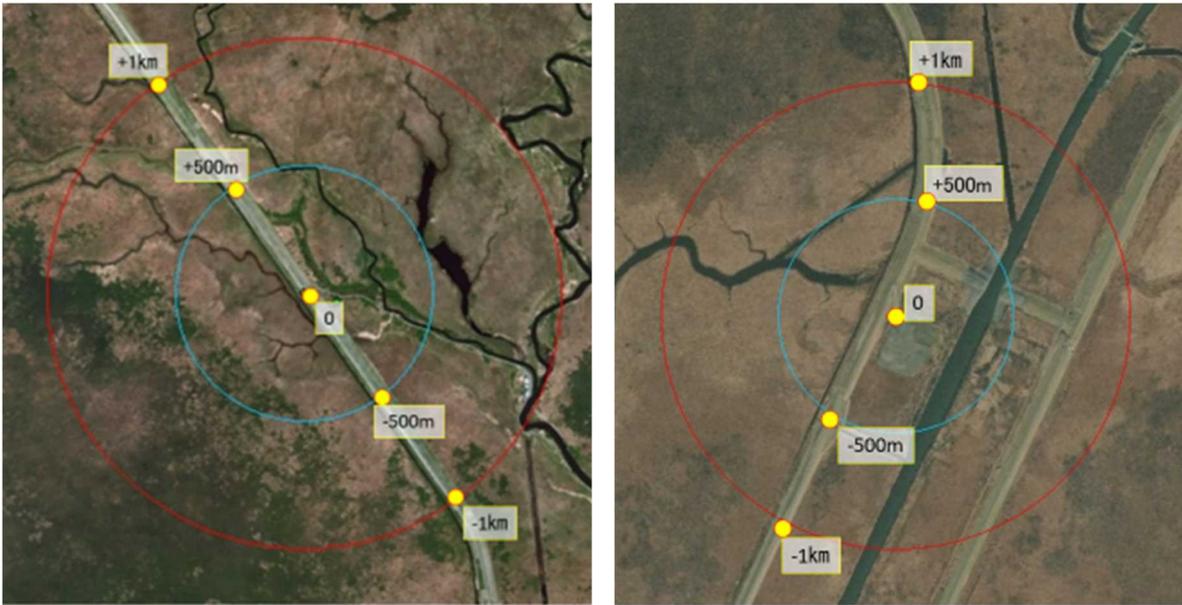


図 2-5 定点センサスのカウント範囲（左：サケマス捕獲場分岐、右：土砂堆積場、青線が 500m、赤線が 1 km）

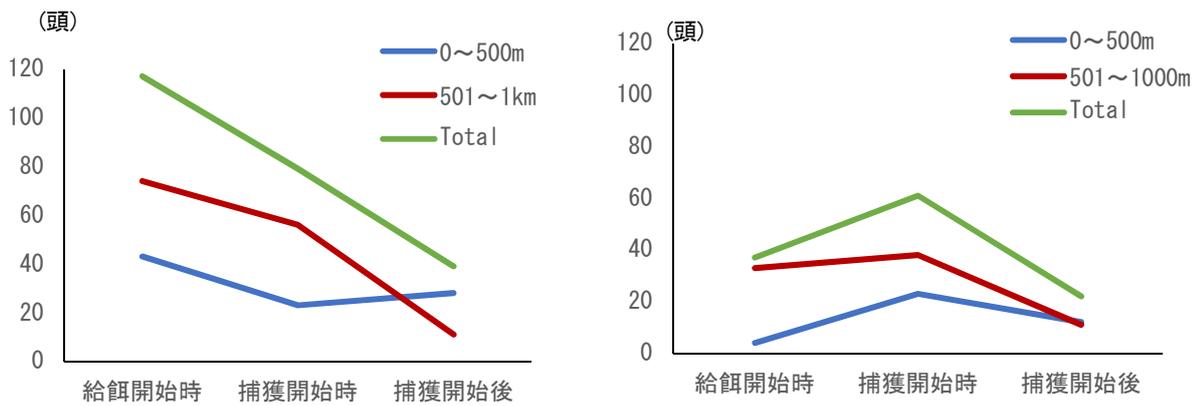


図 2-6 定点センサスのカウント範囲（サケマス捕獲場分岐）、右：土砂堆積場）

- ・ 捕獲を開始した 11 月以降観察数は減少している。
- ・ 500m-1000m の観察数がどちらの捕獲場所においても減少しており、広範囲の誘引の効果が表れている可能性があるが、積雪の影響も考慮する必要がある。

2-3.自動撮影カメラ調査（達古武地区）

達古武地区では令和元年度と同じ4地点（図2-7）において自動撮影カメラを設置し、撮影頻度を指標とする方法を用いてエゾシカの生息状況を把握した。各地点の撮影頻度指数RAI: Relative Abundance Index (RAI = 総撮影頭数/カメラ稼働日数*) を図2-8に示す。

*月によりカメラ設置期間が異なるため、各月の10日~19日の10日間分のデータで計算した。

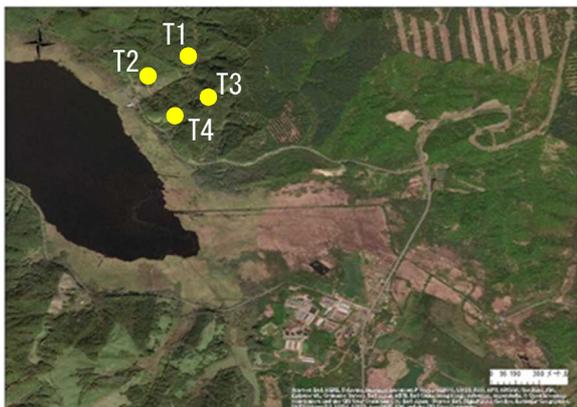


図2-7 自動撮影カメラ設置位置

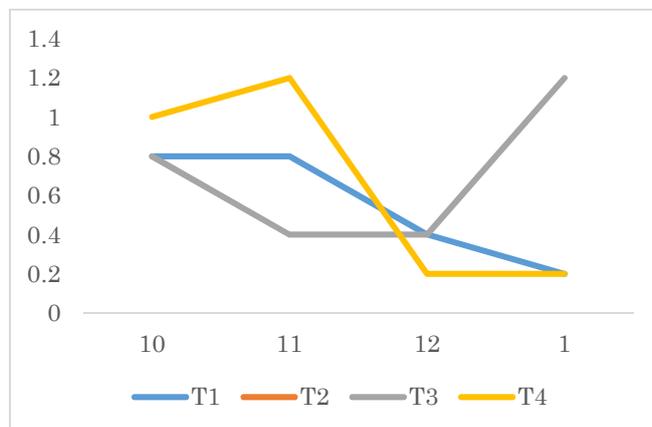


図2-8 各地点のRAI（10月~1月 速報値）

注) T2は機材不良のためデータなし。

- ・昨年度、T1、T2では12月、2月のRAIが最低値となり、3月に最高値となった。T3、T4では2月に最高値となり3月には少なくなる傾向にあった。2月にRAIが低下する傾向は今年度も確認された。
- ・誘引を行わず、自動撮影カメラで撮影頻度を指標にするモニタリング方法は今年度で2年目であり、生息状況把握の精度を高めるには継続して調査を行う必要がある。

3. 赤沼周辺におけるシカ誘導路の設置検討について

(1) 概要

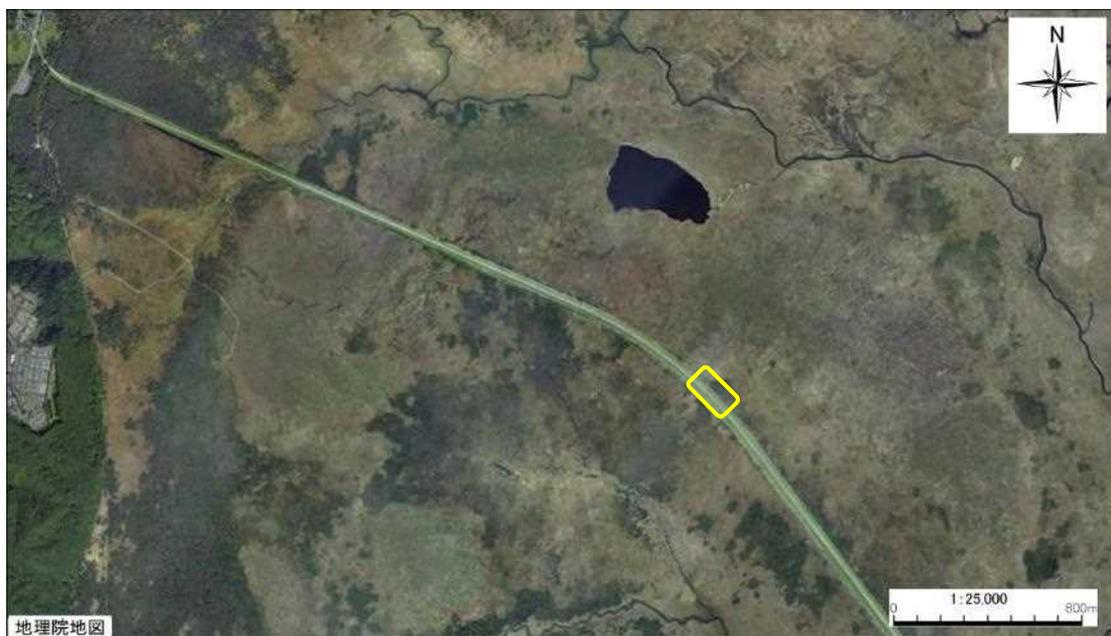
赤沼周辺の高層湿原は保全優先度が高く、エゾシカの利用頻度も高いが、下記の理由により、これまで捕獲が実施できていない。

- ・ 赤沼周辺はワナ設置が可能な場所が少ない
- ・ 堤防道路から湿原までの距離が長く、生体搬出するためのユニックが届かない
- ・ 右岸堤防の堤体上には固定杭の打ち込み等、堤体に直接的な損傷を与えるものは設置できない

令和元年度から湿原内に大型囲いワナを設置して捕獲した場合に、堤防を傷めずに捕獲したエゾシカを搬出する新たな方法を検討している。新たな搬出方法として、湿原内に設置した大型囲いワナから堤防道路近くまで「シカ誘導路」を設置することを考えている。

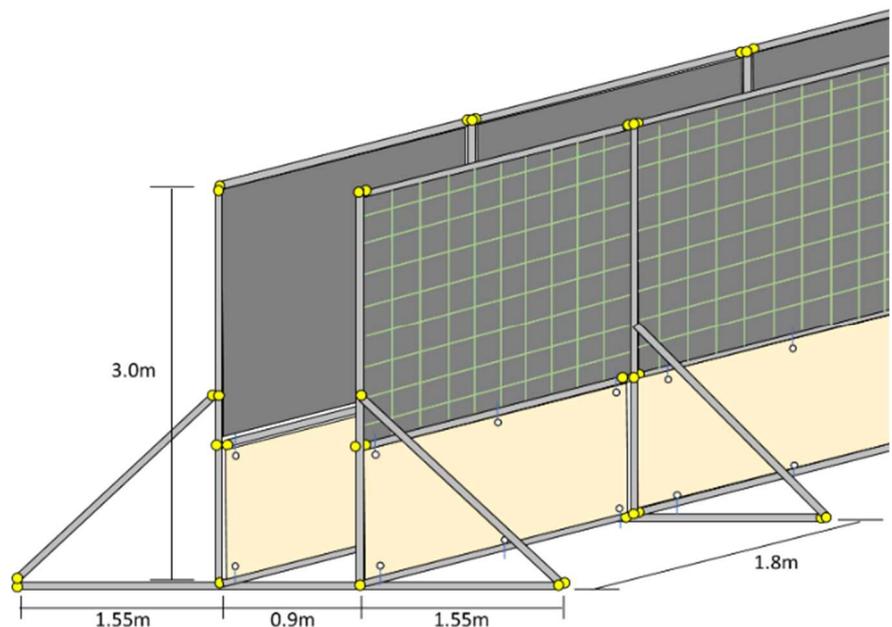
よって、今年度はシカ誘導路を一部試験的に設置し、耐久性や作業の安全性を確認する。

(2) 実施予定位置



(3) シカ誘導路の構造

単管パイプで組んだフレームを1ユニットとして組合せ、傾斜や誘導路の形状に合わせて設置する。壁材には、鋼線入りネットと防草シート、ベニヤ板を使用する。



<シカ誘導の全体模式図>

